

「み言葉が実現するために」
(裏切りと逮捕)
(マルコ14:43~52)

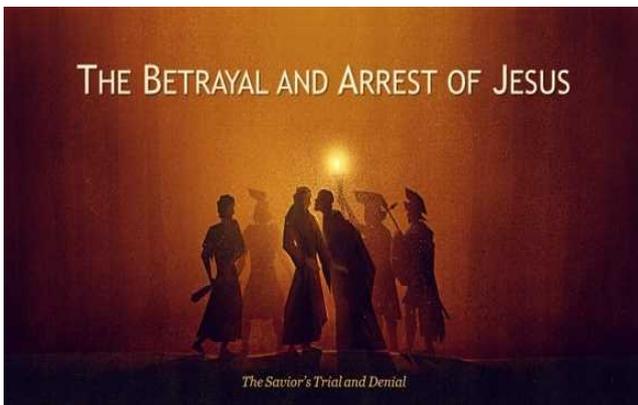
挽地茂男

2019.8.18 日本基督教団・千歳丘教会

わたしたちはマルコによる福音書の11章の「エルサレム入城」以降、主イエスのエルサレムでの物語を読んできました。実はこの11章から16章までのエルサレムでの物語は、主イエスの生涯の最後の一週間の出来事を伝えています。マルコはこの最後の一週間の出来事を伝えるのに、全体で合計16章の福音書の中の6章を費やしているのです。福音書は昔から「長い序論のついた受難物語」と呼ばれてきました。実は、福音書の中心は、イエスの生涯の最後の一週間に含まれている受難物語なのです。実際、福音書の成立過程は、まずキリスト教信仰にと

って最も重要な、十字架と復活を中心とする受難物語が整理され、そのあとイエス・キリストの生前の出来事を伝える物語へと興味が拡大し、主イエスの生前のエピソードが収集されていったと考えられています。つまり受難物語は福音書という物語全体を理解する上でも、最も大きな意味を持っているのです。

そこで、「受難物語」のあらすじをもう一度おさらいしておきましょう。受難物語は14章から始まります。受難物語の背景は過越祭(+除酵祭)です。祭りの賑わいに紛れるようにして、ユダヤ人の宗教指導者たち(サンヘドリンの重鎮たち)は主イエスの暗殺を画策していました。エルサレム神殿の周りには祭の献げ物として屠られる過越の小羊が集められていました。多いときには2万頭を超えと言われる小羊たちの声が都を取り巻いていました。つまり物語全体は、**暗殺の緊迫感と祭のエネルギー**(過越祭・除酵祭)に覆われているのです。イエス暗殺の〈策謀〉と過越の小羊の〈屠殺〉がこの物語の背景です。受難物語の始まりの第1節、つまり14章





1 節は、祭司長たちや律法学者たちは「なんとか計略を用いて (ἐν δόλῳ)、イエスを捕らえて殺そうと考えていた」とつたえます。この「計略」という言葉 (δόλος) はもともと、魚を釣るための餌 [a bait (餌) for fish ⇒ *deceit, treachery, fraud.*] という言葉です。彼らは何とかしてイエスをつ



り上げようとしていたのです。そしてまずはイエスの側

近とも言える 12 弟子の一人が引っかかってきたのです。そして受難物語が動き始めます。

さて受難物語の最初の出来事

は、① 14 章 1 - 11 節「ナルドの香油」(ベタニア) の物語です。主イエスに注がれた純粋なナルドの香油は、イエスの葬りの準備として主イエスに注がれます。無駄遣いを責める弟子たちを尻目に、主イエスは、香油を注いだ女の行為を「はっきりしておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」と賞賛します。

そして 2 つ目の出来事は② 14 章 12 - 26 節の「最後の晚餐」の物語です。主イエスはこの晚餐の席で、受難(十字架上の自分の死)の意味を説明することになります。(1) 晚餐の準備(14:12-16) が整うと、主イエスはベタニアからエルサレム市内へ移動し、晚餐の食卓に着きます。そしてその席上、最も親しい 12 人の弟子たちの中から(2) 裏切り者が出ることを預言します(14:17-21)。そしてパンとぶどう酒を用いて、十字架



(上の自分の死)の意味を明らかにし、主イエスの受難を記念してこの儀式を守り続けるようにと、(3) 聖餐が制定(14:22-25)されます。主イエスに間もなく訪れる十字架での死の意味が明らかにされると同時に、やがて終末(世の終わり)にイエス・キリストとともに祝うメシアの祝宴への希望が語られます。そして、(4)最後の晩餐が終了(14:26)すると、「一同は賛美の歌をうたってから、オリーブ山へ出かけ」たのでした。この時、主イエスの暗殺を画策していたユダヤ教の指導者たちは、このチャンス^{ひとけ}を逃しませんでした。主イエスは人気のない、エルサレム城外のオリーブ山に移動したのです。サンヒドリンに動きが出ます。

背後でイエス逮捕の策略が着々と練られている間の第3番目のエピソードは、14章27-31節。



夜のゲツセマネ

弟子たちのつまずきの予言です。主イエスは、予言して言います。

「14:27……「あなたがたは皆わたしにつまづく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』／と書いてあるからだ」(14:27)。この言葉は、旧約聖書のゼカリヤ書13章7節の言葉です。そしてこの言葉に続いて、「マル14:28 しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く」と謎のような約束が語られます。



弟子たちが初めて主イエスに出会ったガリラヤ、彼らが弟子としての召命を受けたガリラヤ、彼らの信仰の原点、彼らの信仰のふるさとの主イエスとの再会の約束でした。わたしたちは、このガリラヤでの再会の言葉に「放蕩息子」の譬えを重ねて理解したのでした。受難物語の進行にともって、弟子たちは、主イエスを捨て、次々に醜態を演じます。しかし露呈してくる弟子たちの躓きの姿を見る主イエスの目は、異国の地で放蕩の限りを尽くして落ちぶれ果てた弟

息子の帰りを待つ父親の目と同じ目なのです。ガリラヤで弟子たちとの再びの出会いを待つ主イエスの眼差しはそれと重なっています。成功して故郷に錦を飾る者を待つのではなく、自分を捨てていった者を待つ目は、あの父親と同じ眼差しなのです。そして主イエスのその眼差しが、悲惨な受難物語を、どことなく温かいものになっているのです。

先週は第4番目のエピソード、14章32-42節に記された「ゲツセマネ」の祈りの場面を読



みました。目覚めて祈る主イエスと、再々「目を覚まして祈っているように」諭されても眠りこけてしまう弟

子たち。そしてその祈りの結果が、今日の第5番目のエピソード14章53-52節の主イエスに対する「裏切りと逮捕」の場面に露呈します。今日の第五番目のエピソードに入る前に、受難物語の残りのエピソードもざっと見ておきましょう。受難物語は全部で11のエピソードから成っています。す

でに5つのエピソードを見てきましたが、次の第6番目のエピソード、11のエピソードの真ん中に置かれたエピソードが、サンヒドリンによる「イエスの裁判」、14章53-65節です。第7番目が「ペトロの否認」14章66-72節。鶏が二度鳴く前に、ペトロは、三度主を知らないと言います。そして15章に入って、1-20節で第8番目のエピソード「ピラトの裁判」があって、第9番目のエピソードが、21-41節の「十字架」の場面で、第10番目のエピソードが「イエスの埋葬」のシーン15章41-47節。そして16章に入って1-8節に記される第11番目の最後のエピソード「復活」をもってマルコ福音書が完結します。

さて、今日の第5番目のエピソードは、主イエスに対する「裏切りと逮捕」を描きます。43節。

「14:43 さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。」エピソードは「さて、イエスがまだ話しておられると」(ἐτι

αὐτοῦ λαλοῦντος) と始まっています。第4番目のエピソード「ゲツセマネ」の園で主イエスが弟子たちに話していた最後の言葉は14



章41-42節です。祈りから戻った主イエスが、まだ眠っている弟子たちに

語ります。「14:41イエスは三度目に戻って来て言われた。「あなたがたはまだ眠っている。休んでいる。もうこれでいい。時が来た。人の子は罪人たちの手に引き渡される。14:42 立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た。」(a)眠っている弟子たちを叱責された後、(b)「時が来た (ἦλθεν ἡ ὥρα)」と決定的な「時」の到来を確認し

ます。そして再度(c)「人の子は罪人たちの手に引き渡される」と受難を予告して、(d)弟子たちに「14:42 立て、行こう。見よ、わたしを裏切る者が来た」と行動を促します。

裏切る者がやって来ました。ユダは「祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆」の先頭に立っています。この群衆が「祭司長、律法学者、長老たち」から遣わさ



いよいよ捕り方が接近

| マルコ14:43-46 | マタイ26:47-50 | ルカ22:47-48 | ヨハネ18:3-9 |
|--------------------------------------------|----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|
| 取り方の構成員 | | | |
| (a) ユダ(十二人の一人) (b) 祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆 | (a) ユダ(十二人の一人) (b) 祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆 | (a) ユダ(十二人の一人) ——ユダが先頭に立っているが、随員の構成内容は後述 (b) 祭司長、神殿守衛長、長老たち(v. 52) | (a) ユダ (b) 一隊の兵士 (c) 祭司長やファリサイ派の人々が遣わした下役 |
| 手にしていたもの | | | |
| 剣や棒 | 剣や棒 | 剣や棒(後述 v. 52) | 松明やともし火や武器 |
| 逮捕の合図 | | | |
| ユダの接吻 | ユダの接吻 | ユダは接吻するが合図とされていない | ユダの接吻も合図もなし(イエスが名乗り出る) |

れていることに注意が必要です。この群衆はエルサレムの一般群衆とは違います。少し後に、この群衆に「しもべ」(δοῦλον)という言葉を使っていますから、宗教指導者たちの使用人や、神殿境内で物を売っていた商人や両替商も含まれていたかもしれません。いずれにせよ「祭司長、律法学者、長老たち」とイエス逮捕の目的を共有する群衆にちがいはありません。その群衆の先頭に立つユダは、まるで、これから始まる捕り物を指揮する小役人(下っ端の岡っ引き)のようです。44節。「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」とイエス逮捕の手筈を整えます。合図はユダの接吻です。群衆の手には「剣や棒」が握られています。そして主イエスの姿が確認できる距離までやって来ると、ユダがひとり主イエスに近づいて行き、「先生」と言って接吻します(v.45)。すると一気に群衆は、主イエスを押さえ込みます。理不尽な逮捕劇の始まりです。



そして46節。「14:46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。」



この群衆の暴力性は、もう一方の暴力性を引き出します。暴力は暴力を引き出すのです。47節。

「14:47 居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。」弟子たちには「目には目を、歯には歯を」が当然のように思えます。相手が暴力で来るなら、こちらも暴力だ。主イエスがあれほど「あなたの敵を愛せよ。右のほおを打たれたら、左のほおも出せ」と教えておられたのにです。敵が「剣と棒」なら、こちらも「剣」だ。当然でしょ。少なくとも正当防衛だ。自衛のための戦いは戦争ではない、と考えるのです。ここに至って「暴力」についての主イエスの考え方が、この世界と、根本的に違うことが明らかになります。その考え方は、現実離れしていて、空想的にさえ見えてきます。もしイエスの言葉



を、「非暴力的抵抗」として実践したガンジーやマーチン・ルーサー・キングのような人たちがいなければ、群衆の「剣と棒」に対してはこちらも「剣」で対抗するのは当然ではないか、

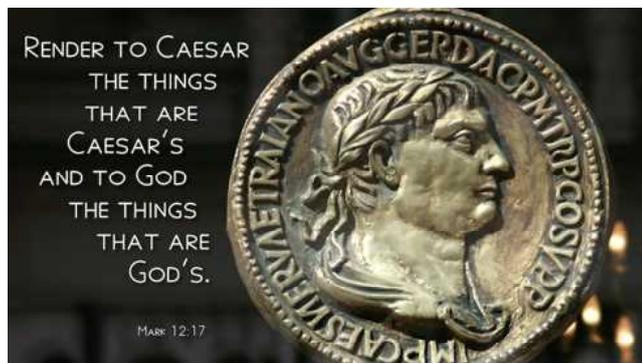
と考える弟子たちに同調するのが自然でしょう。これが、世界の戦争の原理です。とられたら取り返す。殴られたら殴り返す。自分が強ければ、欲しい時には取られなくても取る。殴られなくても殴る。もしゲツセマネの園でこの時、主イエスが相手に手をかけていた

| マルコ14:47-50 | マタイ26:51-55 | ルカ22:49-53 | ヨハネ18:10-11 |
|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 剣で斬りつけた者 | | | |
| 「居合わせた人々のうちのある者」 | 「イエスと一緒にいた者の一人」 | 「イエスの周りにいた人々は事の成り行きを見て取り、「主よ、剣で切りつけましょうか」と言った。そのうちのある者」 | シモン・ペトロ |
| 耳を切り落とされた者 | | | |
| 大祭司の手下(片方の耳) | 大祭司の手下(片方の耳) | 大祭司の手下(右の耳) | 大祭司の手下のマルコス(右の耳) |
| イエスの言葉と癒し | | | |
| (1)イエスは特に制止しない (2)癒しを行わない (3)主要な言葉 (a) なし (b) まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。 (c) 神殿で教えているときに手を下さなかった(彼らに) | (1) イエスは制止する (2) 癒しを行わない (3) 主要な言葉 (a) 「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」 (a') 父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってください (b) まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。 (c) 神殿で教えているときに手を下さなかった(群衆に) | (1)イエスは制止する (2)癒しを行う (3) 主要な言葉 (a) 「やめなさい。もうそれでよい」 (b) まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってやって来たのか。 (c) 神殿で教えているときに手を下さなかった(祭司長、神殿守衛長、長老たちに) (d) 今はあなたたちの時で、闇が力を振るっている。 | (1) イエスは制止する (2) 癒しを行わない (3) 主要な言葉 (a) 「剣をさやに納めなさい。 (b) 父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」(ペトロに) |
| 預言の成就 | | | |
| しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」 | 26:56 このすべてのことが起こったのは、預言者たちの書いたことが実現するためである。」(Cf.26:54) | | |
| 弟子たちの敗走 | | | |
| 14:50 弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。 | このとき、弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。 | | |

ら、この場面は一気に乱闘シーンに変わって、修羅場と化していたでしょう。しかし戦いは起りませんでした。むしろ主イエスの佇まいは静かです。

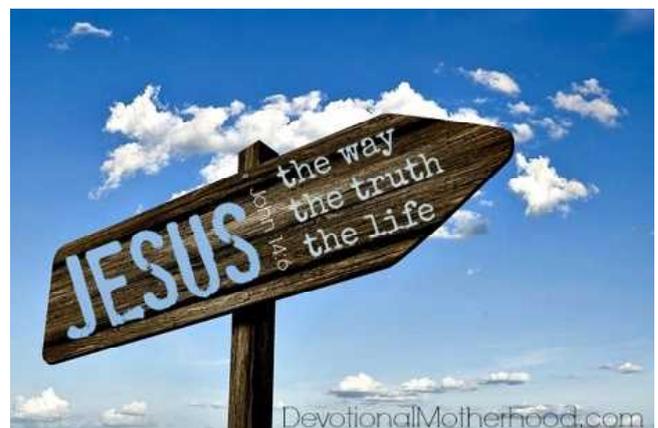
彼は、自分を捕らえに来た捕り方に語りかけます。48 - 49節。

「14:48 そこで、イエスは彼らに言われた。『まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。14:49 わたしは毎



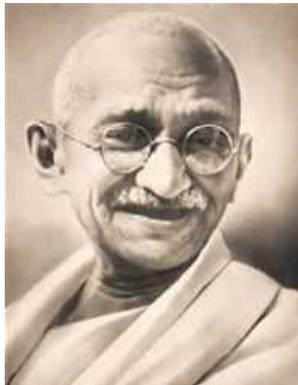
日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。』」捕り方(祭司長、律法学者、長老たち)の不正義と計算が透けて見えます。毎日、神殿境内で教えていたときには、彼らは、群衆を恐れて主イエスに指一本触れなかったのです。彼らは公然たる正義をもって、主イエスに対抗することが出来ませんでした。彼らは正義を愛していたのでも、正義を

求めていたのでもなかったのです。彼らは自分たちの(神殿経済共同体の)利害や利権を守りたかったのです。彼らはそのために邪魔物を消したかっただけなのです。彼らは計算します。イエスの言葉に喜んで聞き入っている群衆を、今は、敵にしない方が良い。しかも祭の間は問題が多い。彼らは機会を待ちました。そして、主イエスの一行が、最後の晩餐の後、エルサレム市内を離れて人気のないゲツセマネに移動すると、今がチャンスとばかりに、彼らは、闇夜に乗じて行動に出たのです。公然と主張し行動できる正義を持たない彼らには、闇に隠れて働く力が頼りでした。それをルカはよく見えています。ルカはこの主イエス逮捕の場面に働く力の暗黒面をこう表現します。ルカの描く主イエスは捕り方に向かってこう言います。ルカ 22章 53節b。「今は



あなたたちの時（ $\eta \acute{\omega}\rho\alpha$ ）で、闇が力を振るっている。」

現代においても、隠然たる力が世界を支配しているように見えます。闇の力が光を押さえつけている。そのように見えるとき、事態がなし崩しに悪化しているとしか見えない時、何が道しるべでしょうか。先ほどのガンジーはこう言



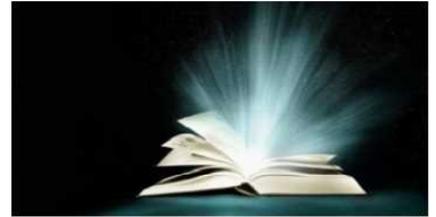
私は失望するとも思う。歴史を見れば、勝利を収めたのは常に真実と愛だ。暴君や残虐な為政者もいた。一時は彼らは無敵だ。そう見える。だが、結局は滅びている。それを思う。

—ガンジー—

いました。「私は失望するとも思う。歴史を見れば、勝利を収めたのは常に真実と愛だ。暴君や残虐な為政者もいた。一時は彼らは無敵だ。そう見える。だが、結局は滅びている。それを思う。」

わたしたちの道しるべは、主イエスの姿です。主イエスの佇まいを支えているのは、み言葉への確信と、（ゲツセマネでみせたような）祈りです。み言葉と祈りをもって、主イエスは「時」に対します。受難物語が描き出す主イエスの姿は、「時」に目覚めて受難を

生ききる者の姿です。受難における主イエスのこの姿が、その基本的な佇まいが、キリスト者の道しるべなので



す。主イエスがみ言葉と祈りを通して得ていたもの、それは「神の前の静けさ」です。

主イエスと対照的な姿を露わにしているのが弟子たちです。50節。「14:50 弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。」

受難物語の描く主イエスと弟子たちは実に対照的です。時の変化に（1）目覚めている主イエスに対して、寝起きの状態のような弟子たち。（2）予め先を見越している予見的な主イエスに対して、その場で場渡り的な反応を見せる弟子たち。（3）冷静にその場に対処する主イエスに対して、混乱している弟子たち。

相手が剣を手にしていれば、短絡的に反応して、こちらにも剣で対応する弟子たち〔=「居



合わせた人々のうちのある者」v. 47〕。（4）祈ってる主イエスに対し

て、眠っている弟子たち。このイエス逮捕の場面における両者の違いは、直前のゲツセマネにおける祈りの結果とも言えます。そして(5)聖書の成就を確信するイエスに対して、聖書的展開に無知な弟子たち。日頃からみ言葉に聞くことを大切に考える姿勢が、人が危機的な状況に置かれたときの姿として明らかになります。主イエスは断言します。「これは聖書の言葉が実現するため」(v. 49)である。祈りとみ言葉は、決定的な「時」の到来に対する最善の準備なのです。祈りは、信仰の呼吸であり、教会の心臓の鼓動だと言われます。聖書は天来の魂の糧であり、信仰のパンと言われます。信仰の心臓がその鼓動を規則正しく続け、生命を維持するパンを欠かさずにいただいているとき、眼前に展開する状況に相応しく行動することが可能となるのです。神と共に「今」を生きることが可能になるのです。

さて今日の箇所には、不思議なエピソードが盛り込まれていることにお気づきだと思います。他の福音書には出てこないマルコだけの記事です。51 - 52節。

14:51 一人の若者が、素肌に亜麻布をまとしてイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、14:52 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。



この不思議な物語は、聖書解釈の歴史の中で、多様な解釈を生んできました。この若者は、歴史的に実在した個人で、実は、(a)使徒ヨハネであったとする説や、(b)主イエスの兄弟ヤコブだとしたり、(c)最後の晩餐をともにした家の住人であるとか、いや(d)マルコの知っている他の目撃者だとする説や、(e)『マルコの秘密の福音書』という外典的断片が残されていて、その記事を証拠として、実は、イエスが死者の中から甦らせた若者に秘義を授けている最中に捕り方が来たために、この若者は裸で逃げたのだ、とする説などさまざまな説がありますが、どれも根拠がありません。

そこで特定の個人ではなく、創世記のヨセフ物語(創39:12-13)のヨセフ——主人ポティファルの妻に誘惑され、着衣を残して逃げ出

したヨセフ—との並行関係を主張したり、アモス書2章16節の「アモ 2:16 勇者の中の雄々しい者も／その日（主の審きの日）には裸で逃げる、と主は言われる」というテーマを引き継いでいるとされたり、あるいは〈カメオ〉〔劇や映画などの一場面に限って顔見世的に登場する、名優やスターによって演じられる端役〕としての福音書記者マルコがここに登場しているとする説などさまざまな主張がなされてきました。しかしどれも決定打になりませんでした。

むしろこの記事は、自分の命惜しさに逃げていく弟子たちを、象徴的に描く〈戯画〉（風刺画）なのです。亜麻布は遺体を包む布で、主イエスの遺体も亜麻布にくるまれました。それは受難を象徴します。それを捨てて逃げていく裸の若者の姿に、敗走していく弟子たちの姿を集約したのです。

弟子たちはどうして、このように醜態ばかりを記録されるのでしょうか。事実だから仕方がないのでしょうか。それだけではないのです。福音書記者が弟子たちの失態・失敗を描くのは、神に対するキリスト者の誠実が、自分自身の

決意や勇気や努力から出てくるものではないことを示そうとするからです。それは神の恵みと憐れみによって可能となるのです。ガリラヤで待つイエスとの再会は、主イエスの赦しの豊かさと、同時に弟子たちの内に湧き上がる新たな力を再確認させることになるのです。

わたしたちは自分のゲツセマネ（静思の時）をもっています。そしてみ言葉がわたしたちの道の光です。神の前の静けさが、主イエスと彼を信じる者（わたしたち）の佇まいです。周囲の混乱の中にあっても御心が成就して行くことを信じて、新しい一週間の歩みに踏み出したいと思います。

祈りましょう。

2019.8.18 日本基督教団・千歳丘教会



14:43 さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。

14:44 イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。

14:45 ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。

14:46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

14:47 居合わせた人々のうちのあ
る者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。

14:48 そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。

14:49 わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」

14:50 弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

14:51 一人の若者が、素肌に亜麻布をまとってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする
と、
14:52 亜麻布を捨てて裸で逃げてしまった。

14:43 Καὶ εὐθὺς ἔτι αὐτοῦ λαλοῦντος παραγίνεται Ἰούδας εἰς τῶν δώδεκα καὶ μετ' αὐτοῦ ὄχλος μετὰ μαχαιρῶν καὶ ξύλων παρὰ τῶν ἀρχιερέων καὶ τῶν γραμματέων καὶ τῶν πρεσβυτέρων.

14:44 δεδώκει δὲ ὁ παραδιδούς αὐτὸν σύσημον αὐτοῖς λέγων, "Ὁν ἂν φιλήσω αὐτός ἐστιν, κρατήσατε αὐτὸν καὶ ἀπάγετε ἀσφαλῶς.

14:45 καὶ ἔλθων εὐθὺς προσελθὼν αὐτῷ λέγει, Ῥαββί, καὶ κατεφίλησεν αὐτόν·

14:46 οἱ δὲ ἐπέβαλον τὰς χεῖρας αὐτῷ καὶ ἐκράτησαν αὐτόν.

14:47 εἷς δέ (τις) τῶν παρεστηκότων σπασάμενος τὴν μάχαιραν ἔπαισεν τὸν δούλον τοῦ ἀρχιερέως καὶ ἀφείλεν αὐτοῦ τὸ ὠτάριον.

14:48 καὶ ἀποκριθεὶς ὁ Ἰησοῦς εἶπεν αὐτοῖς, Ὡς ἐπὶ ληστήν ἐξήλθατε μετὰ μαχαιρῶν καὶ ξύλων συλλαβεῖν με;

14:49 καθ' ἡμέραν ἤμην πρὸς ὑμᾶς ἐν τῷ ἱερῷ διδάσκων καὶ οὐκ

ἐκρατήσατέ με· ἀλλ' ἵνα πληρωθῶσιν αἱ γραφαί.

14·50 καὶ ἀφέντες αὐτὸν ἔφυγον πάντες.

14·51 Καὶ νεανίσκος τις συνηκολούθει αὐτῷ περιβεβλημένος σινδόνα ἐπὶ γυμνοῦ, καὶ κρατοῦσιν αὐτόν·

14·52 ὁ δὲ καταλιπὼν τὴν σινδόνα γυμνὸς ἔφυγεν.